

国語

時間 60 分

〔注意〕

- 1、放送で指示があるまで、この冊子さつしを開いてはいけません。
- 2、この冊子は30ページまであります。ページが足りなかったり、順序がおかしかったり、また印刷が不鮮明ふせんめいで読めない部分があったりした場合には、手をあげて監督かんとくの先生に申し出なさい。
- 3、問題についての質問は一切受け付けません。
- 4、下書きにはこの冊子の下書き欄らんや余白を使いなさい。
- 5、字数指定のある問題では、句読点やカッコなども字数に含みます。



(このページは空白です。)

(このページは空白です。)

一、次の①～⑤の文の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 四十七人のチュウシンが、主君のかたきを見事に討ち果たした。
- ② 部活動では、勝利シジョウ主義よりも自由に楽しくできる方が自分には合っている。
- ③ 昨日の試合は、残り時間三分のゴールですっかりケイセイが逆転した。
- ④ 三溪園は、横浜の有名なケイシヨウ地である。
- ⑤ 全員で行くことは難しいので、ユウシだけでお見舞いに行きます。

二、次の①～⑤の文の~~~~~線部は、() 内の意味を表す言葉です。例にならって、□□にあてはまる言葉をひらがな二文字でそれぞれ答えなさい。

例
いくら彼でも、プロ野球選手には□□打ちできない。(まともに張り合って勝負すること)
↓(答) たち

- ① 助けられた時は□□の息だったが、今ではすっかり元気になった。(今にも息絶えそうな状態)
- ② 日々の食事にも事□□生活を送っている。(必要なものがなくて困ること)
- ③ □□半可な知識では、彼女にかなうまい。(十分でなく、中途半端な様子)
- ④ 大通りには木造の民家が□□を並べている。(多くの家が建ち並んでいる様子)
- ⑤ このチームの選手たちは、□□ぞろいだ。(集まった人々がみな優れていること)

三、次の文章は、村木美涼の『商店街のジャンクション』の一節である。滝田徹は副業として、毎週金曜日と曜日の三日間、着ぐるみの「チョッキー」に入るアルバイトをしている。ある日、兵頭健太と水谷佳菜から突然「チョッキー」に入りたいと言われ、戸惑っているうちに三人で一日ずつ交代で入ることになってしまった。問題文は、その後の初めての金曜日、本業の職場で同僚の松島豊と話をしている場面である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

チョッキーにたどり着いてから半年余り、金曜日を心待ちにして、毎日仕事に励んでいたと言っている。それなのに今日は、家に帰ってもチョッキーはいない。専用ハンガーと専用台座だけが、一人暮らしの部屋に寂しく残されている。

「つまり、帰りたくないという意味か？」

「ああ」

半ば投げやりに、滝田徹は頷いた。

そう、チョッキーがいないあの部屋になど、帰りたくはない。家でのメンテナンスを申し出てからは、チラシ配りのない平日も、チョッキーはずっとあの部屋にいたのだ。定刻通りに戻ると、毎日変わらず丸い目を向けてくれた。仕事の疲れなど、瞬時に吹き飛んだのだ。

でも昨日、本来の持ち主である映画館の主に、チョッキーを届けなければならなかった。せめて、メンテナンスはこれまで通り続けさせて欲しい。そう申し出るのが精いっぱいだった。

「じゃあ、金曜が健太君ということだ」

白髪を切りそろえた「時計」店主の、にこやかな顔が思い浮かんだ。

カウンター席に並んであれやこれやと議論が続いたあと、結局は、一日ずつ順番に、チョッキーに入るという結論になってしまったのだ。今頃は兵頭健太が、チョッキーの頭部を手を取っているに違いない。いや、もうとくに中に収まって、チラシ配りを始めているかもしれない。

① マウスを握る滝田徹の手に、つい力がこもる。

チョッキーがどれ程かけがえのない存在か、どれ程強いつながりを感じているか、ちゃんと説明して、頼むから他を当たってくれと言ったのだ。でも滝田徹は途中から、カウンター席で続く議論に、口をはさむことすら出来なくなってしまう。口数の少なさが、肝心なところで災いした格好だ。

いや、本当にそれだけか。

(1-3)

滝田徹は自問した。

何か、もつと違う感覚が、兵頭健太や水谷佳菜の話を聞いているうちに、自分の中に生じてはいなかったか。

逃げてばかりの人生だったが、いったんチョッキーの中に入れば、逃げずに済むはずだと兵頭健太は言った。普段なら怖くて出来ないことも、チョッキーの中にいる間は出来るかもしれないと、水谷佳菜は言った。それが、二人がチョッキーの中に入りたいと考えた理由だ。

そして滝田徹は、話を聞くうちにだんだんと、落ち着かない気持ちになっていったのだ。

「家が嫌なら仕事って、それ以外の選択肢はないのかよ。……まあ、お前らしいっちゃあ、お前らしいけどな」

苦笑交じりに言いながら、自分のモニターに目を戻すと、松島豊はまたキーボードをたたき始めた。

「……松島」

「うん？」

「* アヒルは、まだ続けているのか？」

② 先ほどから聞きたくて仕方なかったことを、ようやく滝田徹は口にした。

「ああ、まあな」

モニターから目を離さず、たいして気のない様子で松島豊は答えた。

その顔に、滝田徹はあらためて目を向けた。南の島帰りのせいで、照明に不具合があるかのように、そこだけトーンが暗い。

「何故、アヒルを始めたんだ？」

一度は代役を引き受けたが、松島豊がアルバイトをしている理由に、興味を持ったことはなかった。その後も続けているのかどうかを、知りたいと思ったこともなかったのだ。しかし今日、松島豊の顔を見た途端、滝田徹は無性にそれが知りたくなった。

家に帰ってもチョッキーはいない。金曜日だというのに、チョッキーに入ることが出来ない。そして今後はもしかしたら、チョッキーとの関係に、大きな違いが生じてくるかもしれない。この現状がおそらく、滝田徹の中に、松島豊への関心を引き起こしているのだろう。松島豊がアヒルであるがゆえに、引き起こされる関心だ。

南の島へバカンスなどと、アヒルとそこまで距離を置いて、松島豊は何も感じていないのだろうか。

「何故って……なんでだったかな」

(1-4)

モニターを見たまま、松島豊は首を傾げている。

「いつからやっているんだ？」

「ああと、結構前だな。学生の頃からだから、ここで働き始めるよりも前か」

「え」

A「こともなげに語られたその言葉に、滝田徹は動きを止めた。

「それがどうかしたのか？」

「い、いや……」

つまりもう十年以上、下手をすると十五年近くも、松島豊はアヒルだったというのか。動揺を何とか押し込めつつ、滝田徹は、松島豊の顔を見つめ続けた。

松島豊は、あまり背が高くない。ほぼ平均的な身長の滝田徹を、八掛けにしたくらいだ。よって足の長さも、ほぼ八掛けと言っているだろう。つまりアヒルとしては、滝田徹よりもよほど、見栄えがするということだ。

「一日とか二日とか、最初はそんな約束だったんだけど、なんかかんや言って、ずっと続いているなあ。あの手のバイトってさ、成り手が少ない分、結構時給がいいだろう。大した仕事でもないのにさ。学生の頃は、そういうのが狙い目だったからな」

「就職しても続けているのは、どうしてなんだ？」

決して高給取りではないが、副業が必要なほど、低給というわけでもない。③松島豊がアヒルにいるのには、何か他に、理由があるはずだと思った。

「そうあらためて訊かれると困るけどさあ」

キーボードを打つ手を止めて、松島豊はめずらしく、いくらか戸惑ったような表情を見せた。

「俺さあ、そこそこしゃべるだろ？」

「……」

そこそこの意味を取り違えていないかと思っただ、滝田徹は黙っていた。

「性分なんだよなあ。誰もしゃべってないとき、俺が求められてるような気がしてしょうがないんだ。追い立てられるって言うかさ」

腕組みをしながら、苦笑を浮かべて頷いている。

「お前がつくづくうらやましいよ。下手すりゃ、一日中だつて黙っていられるだろう。一種の特技だよな。俺から見や、特殊技能の部類だ」

嫌味を口にしてしている気配は、松島豊からは全く感じられない。

「けどさ、あの中に入ると、黙ってられるんだよな。たいして努力もいらない。だいたい、アヒルにしゃべりを期待してる人間なんて、誰もいないからな。気楽なものだ」

「それが、続けている理由か？」

「ま、一種の息抜きだな。とは言え、一生アヒルと一緒に生きてわけにも、いかないんだけどな」

滝田徹は目を見開いて、平素より茶色がかった松島豊を見つめた。

何か、もつと違う感覚。

兵頭健太と水谷佳菜の話を聞きながら、少しずつ生じていた感覚だ。

そしてそれこそが、チョッキーを守り切れなかった本当の理由ではないかと、滝田徹の中には今、疑念が生じ始めている。そのせいで、肝心なことは何も言えないまま、金曜は兵頭健太、土曜は水谷佳菜、そして日曜にようやく滝田徹という、店主の采配に従ってしまったのではないのかと。

何か、もつと違う感覚。

自分自身の感覚でありながら、もうあと少し、手が届かないもの。なかなか正体を見極められない、もどかしい距離感が、今日一日、滝田徹から集中力を削ぎ、苛立ちをあとに続けていた。

それなのに、松島豊はたった今、その正体をあつさり口にできなかったか。

もどかしい距離感を、一気に引き寄せてはくれなかったか。

柴犬のような薄茶色で、三角に垂れた耳と左目の周り、野球ボールほどの丸い尻尾が焦げ茶色。そして赤い首輪。

チョッキーを思い浮かべるだけで、心の中に愛おしさがこみ上げてくる。

チョッキーの中に収まり、チョッキーという存在に包まれることで、滝田徹はいつも守られていた。

同時に、この上もない解放感に満たされていたのだ。巨大アヒルの中で初めて知った、B比類のない解放感だ。

でもそれは、いったい何からの解放感だったのか。

誰が見てもチョッキーでしかないということとは、滝田徹はそこに、存在しないということだ。その状態で、この上もない解放感を味わっていた。つまり、滝田徹であるということから、滝田徹は解放されていたと、そういうことではないのか。チョッキーの中にいる限り、滝田徹として行動することはもちろん、滝田徹として物事を考える必要もない。それこそが、滝田徹の心をこれまでないほどに、軽やかにしてくれていたのではないのか。

しかし、滝田徹は気づき始めてしまった。

逃げ場所を求めている兵頭健太にとってはもちろん、水谷佳菜にとってもまた、チョッキーは、一種の逃げ場所として機能しようとしている。二人の言い分を聞きながら、そんなことにチョッキーを利用してくれるなど、いったんは腹を立てたのだ。

それでも、じわじわと落ち着かない気持ちは湧き起こり始めた。

自分にとってはどうなのか。

自分にとってもチョッキーは、逃げ場所として機能しているのではないのか。

そして松島豊はたった今、こう口にした。

一生アヒルと一緒にってわけにも、いかないんだけどな。

平日は仕事をして、週末はチョッキーの中に入る。それをお前は、このまま一生継続していく気なのか。

その問いかけこそが、「何か、もつと違う感覚」の正体だ。チョッキーと距離を置かざるを得ない状況に追い込まれて、初めて生じた感覚だ。

初めて、自分の内側から生じてきた問いかけだ。

ふいに、チョッキーの体温を肌と感じた気がして、滝田徹は泣きたくなる思いだった。

「おい滝田、お前、大丈夫か？」

松島豊が、手を止めて、いぶかしむような表情を向けている。

「あ、ああ……」

頷きつつも、④滝田徹の動揺は収まらない。チョッキーと共に過ごした日々の記憶が、次から次へとよみがえってくる。古めかしい商店街で過ごした時間は、滝田徹にとってはまさに、心躍るひとときだったのだ。

「何があったか知らないけどさ、あんまり無理すんなよ」

「無理？」

「口数が多いだろうが、どう考えても。いるはずのない時間にたまたまいるからって、気を遣って、俺に調子を合わせなくてもいいんだぜ。黙りこくってそこにいたところで、一向に気にしないんだからさ、こっちは。俺は俺で、しゃべりたくなったらしゃべる。いつも通り、気楽にやろうぜ」

「いや、別に……」

「いいって、いいって」

(1-7)

言いかけた滝田徹を、すぐさま松島豊がさえぎる。

「それ以上、多くを語るな。体に悪いぞ。ただでさえ、やったこともない時間外労働に従事してんだ。あぐく協調性まで見せるなんて、俺はそこまで、わがままな男じゃないつもりだ。いつも通りの滝田徹でいてくれ。そのほうが、こっちはるかに気が楽だ」

べらべらと、バカンスの疲れも取れた様子で、すっかり本来の調子を取り戻している。

「だから別に……」

お前に合わせているつもりはない。

そう言いかけて、滝田徹は口をつぐんだ。松島豊の言葉に甘えようと思ったわけではない。再び、何かが心に引かかったのだ。

わがまま。

声には出さずに、口の中でその言葉を繰り返した。

耳にするたびいつも、心の中に鈍い痛みが走る。四年前に去って行った彼女が、最後に口にした言葉だからだ。

「自分がものすごくわがままな人間になった気がするの」

あの日以来、わがままという言葉の意味も、よくわからなくなってしまった。どうして彼女は、そんな考え違いをしてしまったのだろう。

今にも泣き出しそうだった彼女の顔が、頭の底にずっとこびりついている。

「……松島」

「なんだ？」

キーボードをカシャカシャと言わせながら、松島豊は、鼻歌でも歌うような口調だ。

「もう一つだけ、質問をさせてくれ」

「おう、いいぞ」

「お前が僕と、すでに二年間交際をしているとして」

「ゲホッ」

途端に、松島豊がむせた。そのまま、続けざまに咳込んでいる。

「どういう原理が働くか、自分はわがままだと感じるんだ？」

かまわずに、滝田徹は続けた。

「何を言い出すかと思ったら……ゲホ……」

(1-8)

「お前の考察を、是非とも聞かせてくれないか」

「そりや……」

涙目になった松島豊は、さらに何度か咳込みながら、あえぐように息を吸い込んだ。

「そりや、何でもかんでも俺の言い分が通れば、さすがにそう思うかもしれないな……ゲホッ……二年だろ、普通ならお互い、我が見えてもおかしくないだろうしな」

「それは、悪いことか？」

「悪いつつうか……落ち着かないだろうが。つまりは、お前の本音が、見えないってことだからなあ。

適当にあしらってるだけじゃないかと、陰で馬鹿扱いしてんじゃないかと、何つうの、疑心暗鬼ってやつか？」

「いや、断じて馬鹿扱いはしていない」

彼女のことを、そんなふうにしたことはただの一度もない。

「お前のほうはそうでも、疑心暗鬼ってやつは、そういうもんなんだって。いつぱん思い始めると、止まらないんだ」

「……いつたい、どうすればよかったんだ？」

呆然とつぶやく滝田徹の脳裏には、あの日の光景が、ありありとよみがえっていた。待ち合わせた店の、料理の匂いまでもが漂ってくる。

「知るかよ」

ようやく咳が収まったのか、松島豊が息をつく。

「俺はお前と、交際なんかしてないからな」

肩をすくめる松島豊を、滝田徹は呆然と見つめた。もちろん、松島豊を通して、沈痛な面持ちで向かいの席に座っていた、あの日の彼女を見つめていたのだ。

滝田徹はあの日、ごめんと口にすることしか出来なかった。自分に非があるのなら、それ以外の言葉を、口にはしてはいけないと思ったからだ。でも彼女はその瞬間、今にも泣き出しそうな顔になった。

⑤ どうしてそんな顔をするのか、滝田徹には全くわからなかったのだ。別れたいと言いつけたのは彼女なのに、何故先に泣き出すのか。泣き出したのはこっちだという思いを、滝田徹は必死で押さえつけていた。

「……交際、してないよな？」

滝田徹の視線を受けて、松島豊の目にはいくぶん、怯えたような色が浮かんでいた。

しかし滝田徹の目に映っているのは、泣きそうになりながら、それでも泣かずに去って行った、彼女の後ろ姿だった。

もしかしたら、あの日口にするべきだったのは、謝罪の言葉ではなくて、松島豊が言うところの「本音」だったのだろうか。

滝田徹の頭の中には、たった今気づいたそんな思いが、色濃く広がり始めていた。

「ずっと一緒にいたいと、言つたほうがよかったのか？」

滝田徹のつぶやきに、椅子を後ろに撥ねのけるようにして、松島豊が立ち上がった。

「や、やっぱり帰れ。帰りたくなくても帰れ。お前には、修験僧のような生活が一番似合ってるんだ。時計を見ろ。もう七時を過ぎたぞ。体中の細胞が今、軋んでるんだ。その音を聞け。な、滝田、耳を澄ませ」

「それこそ、わがままじゃないのか……？」

「そんなことはない。それはお前の思い違いだ。いいか、滝田、時報代わりにもなりそうなお前の仕事を、会社中の人間が知ってるんだ。これがどれ程大変なことか、わかるか？ 十年働いていてもめったに顔を合わせない人間がいるって、こんな業務形態の会社の中で、お前の存在だけは誰もが知ってるんだ。知らない人間はいない。滝田徹という男は十年以上、九時から五時半という勤務時間を完璧に守り通している。もはや定説だ。これは言い換えれば、お前が長い時間をかけて築き上げてきた、信用でもあるんだ。だからな、⑥ 滝田、自信を持て」

立ったままの松島豊が何かを力説していたが、滝田徹の耳にはほとんど届いていなかった。最後の言葉以外は。

「……自信？」

「ああ。絶対にわがままなんかじゃない。自信を持って、帰れ」

そうだ。ずっと、彼女の気持ちを一番大切に思ってきたのだ。その自分の考え方に、どうして自信が持てなかったのだろう。大切だからこそ悲しませたくないのだと、その気持ちに偽りは無いのだと、何故言えなかったのだろう。

「どつちもいい子だから、上手くないってこともあるんだよね。相手の気持ち考えて、自分の気持ち、考えないからね」

独り言ともつかない店主の言葉が、もう一度聞こえたようだった。

もしかしたら彼女も、さっきの松島豊のように、無理をさせているのではないかと、そんなことまで

考えてしまっていたのだろうか。

長いため息が、滝田徹の口をついた。

結局は、自分の至らなさが招いた結末だったということなのだ。最後の最後に彼女を、深く悲しませてしまったに違いない。悲しませたくないと思うあまり、結局は悲しませてしまう。これこそ、本末転倒と言わずして何と言うのか。

「お、おい、滝田、滝田、大丈夫か？」

「ありがとう、松島。前回といい、今日といい、お前は僕にとってまさしく『インフォメーションセンタ―』だ」

「……？」

どこに向かうべきか。どうやって向かうべきか。

客に対してそれを提示するのが、水谷佳菜の仕事だという。兵頭健太はそこで、自身が向かうべき場所を、水谷佳菜に指し示してもらったのだ。

そして今日、滝田徹は初めて、松島豊の意見を参考にしようと考えた。

⑦ 松島豊の言葉がなかったら、自分の馬鹿さ加減に、一生気づかずにいたかもしれない。今さら気づいても、どうなるものでもないだろうが。

「帰る」

力なくつぶやくと滝田徹は、パソコンの電源を切り、机の上を整頓して、カバンを手を取った。

「……お疲れ」

松島豊がようやくそう口にしたとき、滝田徹はすでに、フロアの出口に差し掛かっていた。

——村木美涼『商店街のジャンクション』による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

(注) *1 「時計」店主……商店街にある喫茶店「時計」の店主。「映画館の主」の友人。

*2 アヒル……松島豊が学生時代からのアルバイトで時折入っている着ぐるみ。

*3 沈痛な面持ち……深い悲しみに沈んでいるような表情。

*4 修験僧のような生活……ここでは、時間に正確に行動する生活のこと。

問一 ～～線部A「こともなげに」、B「比類のない」、C「ありありと」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「こともなげに」

ア 買ったばかりのアイスクリームを落とした女の子が、こともなげに泣きじゃくっていた。

イ こともなげに故郷に戻れずにいる彼は、望郷の念を抱いている。

ウ 段差につまづいて転んだ男の子は、こともなげに立ち上がって元気に走り去っていった。

エ ありえない光景を目にした彼は、こともなげに立ち尽くしている。

オ 金メダルのかかった二人の戦いは、こともなげによって決着がついた。

B「比類のない」

ア どうか遠慮せずに、比類のない意見をお聞かせください。

イ 生物学上、比類のない生物はこの世に存在しないと言われている。

ウ 一切の財産を失った彼は、比類のないものを食べて生活している。

エ 彼は、比類のない才能をいかなく発揮して、数々の名作を世に送り出した。

オ 宿題を忘れて怒られた彼は、比類のない表情を浮かべた。

C「ありありと」

ア このキャラクターは、全世界のありありとある人の心を魅了し続けている。

イ この小説では、近未来の都市の様子がありありと描かれている。

ウ もっとありありとした鮮やかな色づかいにした方が、見栄えがよくなるに違いない。

エ クリスマスにもらったぬいぐるみを、ありありとかわいがっている。

オ 昨日は風邪で欠席していた彼も、今日はありありと登校していた。

問二——線部①に「マウスを握る滝田徹の手に、つい力がこもる」とありますが、このときの滝

田徹の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が毎日メンテナンスをして清潔を保っているチョッキーに他人が入ることで、自分の努力が徒労に帰すことへの怒りを感じている。

イ いつも口数の少ない自分自身の性格のせいで、何よりも大切なチョッキーを守りきることができず、チョッキーに対する罪悪感でふさぎこんでいる。

ウ 自分以外の人間がチョッキーの中に入ることを思い浮かべて、チョッキーを渡したくないと強く言えなかったことをよりいっそう悔やんでいる。

エ 誰よりもチョッキーのことを思っている自分がその中に入れないばかりか、今までの経緯を知らない兵頭健太が入っていることを思い、喪失感に包まれている。

オ 日々の疲れを癒やしてくれたチョッキーを失ったことで、自分にとってかけがえのない存在であつたチョッキーへの思いをかえって強く認識している。

(1-13)

問三——線部②に「先ほどから聞きたくて仕方のなかったこと」とありますが、滝田徹はどうして

聞きたかつたのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつも一緒にいたチョッキーが今どうなっているかを想像するとやりきれず、その気持ちをぶつけられるのは目の前の松島豊くらしいしかなかったから。

イ チョッキーとの付き合い方を見つめ直すにあたつて、学生の頃から十年以上もアヒルと関わってきた松島豊がアヒルとどのように付き合ってきたのかを聞いて、参考にしようと思ったから。

ウ 慣れ親しんだチョッキーとの別れがつらく、自分と同じようにアヒルを心の支えにしてきた松島豊に助言を求めることで、そのつらさを乗り越えて少しでも前向きになろうと思ったから。

エ チョッキーと同じような着ぐるみのアヒルに入っていた松島豊なら、他人からはなかなか理解されない自分の話を聞いて共感してくれるのではないかと思ったから。

オ チョッキーのことを考えると居ても立ってもいられず、松島豊とアヒルとの関係性を知ること、今後のチョッキーとの関わり方が見えてくるかもしれないと思ったから。

(1-14)

才 自分のペースをかき乱してくる滝田徹の言動に面食らいつつも、このままでは気がすまないの
で、一言皮肉を言つてやろうと思つてゐる。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

二〇年近く前になるが、私は『妖怪学新考』（一九九四年）という本を書いた。その冒頭で、議論の出発点になる、①「妖怪」という言葉をどのように定義したらいいのかという問題で、悪戦苦闘した。

しかしそこでは、「妖怪」とは何かということについて、実は十分に答えを出し切れなかった。

現在でもまだ暫定的な定義に留まっているのだが、その本のなかでは、「妖しい」「怪しい」という二つの言葉を重ねているのだから、人間が遭遇したときに「不思議なもの」「不思議なこと」という事柄であって、それをとりあえず「妖怪存在」（京極夏彦風に言えばモノ）と「妖怪・怪異現象」（コト）に分け、その統合的な意味でのカテゴリとして「妖怪」を定義した。さらに「妖怪」と「神」として把握される存在とを区別するために、「祭祀」の有無という条件をつけたらどうか、とも提案した。

学問的な議論をするためには、用語や概念を定義する必要がある。そうしなければ、一人勝手な議論をしてしまい、共通の議論の場を確保できない。多くの研究者がともに了解する定義や概念であることが望ましいが、まだ定着していない場合は、なおさら自分の用法を研究者たちに知らせる必要がある。前述の本のなかで、「妖怪」には、視覚によって把握される、形のある存在としての「妖怪」ばかりではなく、聴覚によって、あるいは触覚や嗅覚によって把握される「妖怪」もあることに注意を促した。「妖怪」という概念を限定しつつも広く規定するのが、研究の戦略上、得策と考えたからである。

たとえば、「ぬりかべ」という民俗事象がある。これは、野山を歩いていて、突然先に進むことができない現象をいう。もし妖怪を「存在」として定義すれば、こうした現象は「妖怪」から排除される。ところが、この「ぬりかべ」現象の伝承をもとにして、水木しげるはそれを絵画化し存在化している。そうすると、「ぬりかべ」現象は「ぬりかべ」存在に変換されて、「妖怪」のカテゴリに含まれることになる。京極夏彦風にいえば、「ぬりかべ」という現象があるから、「ぬりかべ」という存在がいる、という表現に変わってしまうわけである。

民間で語り伝えられてきた「妖怪」の多くは、「小豆あらい」「天狗倒し」「古杣」などのように、聴覚でとらえられた「現象」としての「妖怪」である。私はそうした不思議な現象をも含めて「妖怪」を定義しようとした。さらに言えば、水木しげるの絵のように、「ぬりかべ」が存在として描かれたとしても、その存在の出現それ自体はやはり「妖怪現象」といえるだろう。「存在する」とは「現象」の一

(1-19)

形態なのである。

このように、議論を成り立たせるために、なによりもまず基本となる用語や概念の定義が求められる。しかしながら、日本の人文科学では、議論の前提となるそうした定義をおこなおうとしない傾向がとて強い。議論のキーワードを、たとえば、「聖なるもの」という言葉を乱発しながらも、「その概念をあえて定義しない」などと聞き直った物言いをする論文さえも見出される。文脈から読者が勝手に推測せよ、というわけである。これでは「学術論文」とはいえず、「二次的な文学作品」といったほうがいいのだろう。

② 私はなぜ「妖怪」を取り上げようと思ったのか。「妖怪」はこれまでほとんど学術的に論じられることがなかった。しかし、「妖怪」をあれこれ考察していくと、これまでとは違った角度から日本人の精神生活の「見えない世界」を「覗く」ことができるように思われた。どのような世界が覗けたのかは、私の妖怪関連の著作、たとえば前述の『妖怪学新考』とか『日本妖怪異聞録』『酒吞童子の首』『異界と日本人』といった本を読んでいたきたい。ここでは「妖怪」を学術的な議論の場に持ち出してくるための手続きや分析方法・視点について、少し考えてみたい。

私が専門とする文化人類学とか民俗学は、なによりもまずフィールドワークを大切にしている学問である。図書館に行つて本を読むことも、もちろん大事な仕事のひとつである。しかし、この学問の特徴は、それと同時に、いやそれ以上に自分自身がさまざまな地域に出かけていって、そこに住む人たちの生活文化やその社会の仕組みなどを調べ、それを記述し、そこからいろいろな問題意識や発想法を得て、特別なテーマを設定して議論することにある。その場合の人類学的視点の大きな特徴の一つは、ホーリズム（全体論）とかホーリスティックな視点などと評されるところにある。すなわち、文化を多様な側面から構成された統合体として記述する点に価値を見出してきた。そのため、人類学者や民俗学者、とくに人類学者は、調査地の社会・文化をできるだけ全体論的に描き出すことに腐心してきた。

しかしながら、そうはいっても、短期間に一挙にその全体を描き出すことはできない。このため、自分の好みにあった側面からアプローチする。その自分の好みは、私の場合、「信仰」とか「宗教」と呼ぶ側面であった。そのなかに「妖怪」が含まれていたのである。

今から三〇年ぐらいも前になるだろうか、三一歳のときに、『現代文化人類学』という教科書の編纂に携わったことがある。「宗教と世界観」という部分を担当したのだが、そのなかで、「信仰」という用語の定義・説明をしなければならなかった。私はアメリカの人類学者の意見にしたがつて、「信仰」

(1-20)

を「知識」という広い概念のなかに組み込んで定義することをした。人間が生まれてからいろいろな「知識」を身につける。そういう知識のなかのある部分に「信仰」というラベルを貼ることができる。「知識」もあると考えたのである。人間の知識には、二つのタイプがある。一つは「科学的な知識」であり、もう一つは、「世俗的な（非信仰的）・道具的な知識」である。

「世俗的・道具的知識」のなかには、今日では科学的根拠をもつといえる知識もあるが、その多くは慣習としての知識がかなりの比率を占めている。この「世俗的・道具的知識」から「科学的な知識」を切り出した残りが、科学的根拠のない習慣的な「道具的知識」とすることもできるであろう。

私たち日本人はいろいろな食べ物を食べている。その一方では食べない、食べてはいけない動物や植物もある。ゴキブリやアリは食べない。でも、ゴキブリやアリを食べても病気になるわけではない。もちろんその辺を徘徊しているゴキブリをそのまま食べれば病気になるかもしれないが、それを唐揚げにすれば殺菌できるし、食べたらかうおいしいかもしれない。だが、私たちはそれをしない。科学的にはそれを食べたら死ぬということではないし、むしろ栄養があるかもしれないが（調べたわけではないが）、私たちの社会では、食べ物にはしていない。単に「食べ物にしない」というだけのことである。そうした慣習的・文化的知識をさまざまな社会はもっているのである。しかし、科学が進めば、科学的に栄養価が高いということで、これまでは考えられない生き物が食料になるかもしれない。

【中略】

その一方では、信仰的な理由で食べてはいけない動物もある。日本のある地方ではウナギを信仰上の理由から食べることが禁止されている。こうした「知識」は「超越的もしくは神秘的な（霊的存在・力）とも表現できる」存在や力を前提とした知識」と規定することができる。「超越的・信仰的知識」には、霊的存在や神秘的力があることを確信している信仰者の知識からそうした存在に関わる知識を学習しただけの知識まで多様な内容をもっている。

いつの時代でも、「今日の観点」からすれば、知識は、科学的根拠があるといえる知識、科学的には根拠はないが慣習的に習得した知識、信仰的知識の混合としてあった。もともと、それらの知識を習得している人びとにとってはすべて「合理的な知識」であった。日本人がアリを食用としないことも、③「ぬりかべ」のような現象を「狐狸」の仕業と説明することも、それを信じる人びとには「理にかなった説明」だったのである。

ここで大切なことは、「今日の観点」ということをしっかり自覚することである。その上で、当該社

会に内在する考え方を把握することである。当該社会のなかに、④「科学的知識」「非科学的な道具的知識」「信仰的知識」の概念を持ち込んでいるのは、私たちなのである。そうすることで当該社会の知識をより深く理解する視点が切り開かれる。まず文化の諸構成要素から、「知識」という概念で文化要素のある領域を括り出し、それを腑分けしながら考察する。それがいわゆる「分析する」という知的な作業なのである。

さて、それでは「怪異」とか「妖怪」といった語を用いて表現する現象・存在は、⑤「どのように分析された「知識」のどのような部分にかかわっているのか。どのような知的メカニズムが働いているのだろうか。」

それを、ここでは「幽霊の正体見たり枯れ尾花」という有名な川柳を使って説明してみよう。ある月夜の晩に、寂しい道を一人で歩いていた。ふと脇をみると、黒い影が動いているのが目に入った。その人はびくくりして「さては幽霊が出たか」と思って逃げ出そうと思ったが、気を落ち着けてじっくりその影を見ると、枯れた尾花が風に揺れ動いているだけだった。「⑥なあんだ。枯れ尾花か」というわけである。

第一段階では、この人は月明かりだけの夜の闇のなかに黒い影を認めたとき、それを彼が持っている知識のなかでも「信仰的知識」にとっさに照らして説明しようとしたのである。つまり、「黒い影」は「怪異・妖怪現象」と判断され、その正体は「幽霊」ということになった。そのまま、この人がその場から逃げ出したならば、きつとこの体験はずっと「幽霊に遭遇した体験」ということになっただろう。最初から最後まで「信仰的知識」によって説明するわけである。

しかし、幽霊が出たと一瞬判断したもの、ほんとうに幽霊なのかを確かめようとする気持ちが生じ、おそろおそろその影の方に近づいてよくよく見ると、枯れ尾花が風に揺れていた。この第二段階では、「科学的知識」「道具的知識」が改めて動員されて、その知識の範囲内で、この現象は説明されることになったのである。すなわち、当初は「怪異・妖怪現象」として把握された「黒い影」は、情報フィードバックによって「怪異・妖怪現象ではない」と訂正される。また、この人に同行者がいて、その同行者は、隣の人が「幽霊が出た！」と叫んで逃げ出したときも、終始冷静沈着であって、「黒い影」を最初から草のたぐいが動いているだけであろうと判断していたならば、その人の前にはまったく「怪異・妖怪現象」は立ち現れなかったことになる。

その人が「信仰的知識」をまったくもっていないわけではない。ただ、この状況ではそれを「黒い影」の説明のために動員する必要を感じなかったのである。

現代では日ごろから、日常生活のなかに生じるさまざまな現象を「霊的存在・力」に結びつけて説明してはいけない、そう考えることは非科学的なことだという、近代の科学・合理主義的な教育を受けてきた。ときには不思議に思うことでも、不思議に思わないように慣らされている。いわば「道具的知識」を身につけている。しかし、昔は相対的に「信仰的知識」で説明しようという傾向が強かったようである。

日本の「妖怪」に関する文化も、こうした「信仰的知識」の一角を占める知識であり、それを「温床」としつつ、さらにその知識が「信仰的知識」という枠を越えた知識、もう少し積極的な言い方をすれば、人びとの想像力（創造力）を刺激して豊かな文化領域を、つまり⑦「エンタテインメントとしての妖怪」を生み出した、と考えられる。

——小松和彦『妖怪文化入門』による

（問題作成上の都合から原文を一部中略し、また表記も改めた）

（注） * 1 祭祀……神々や祖先をまつこと。

* 2 腐心……ある目的のために心を砕いて工夫などをする事。

* 3 徘徊……うろうろと歩き回ること。

* 4 狐狸……キツネとタヌキのこと。人を化かすと言ひ伝えられている。

* 5 情報のフィードバック……新しい情報を得てそれに対する反応を返すこと。

問一 線部A「動員」、B「温床」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「動員」

ア 聖光祭を円滑に運営するために、それぞれのグループにひとつずつ役割を動員する。
イ 芸術作品を鑑賞するときは、五感を動員してその場の空気を感じ取ることが大切だ。
ウ この時間帯はお客さんが多いわりにはお店にいる動員が少ないので、とても忙しい。
エ 昨日、隣の家で動員してきた家族が、引っ越しの挨拶にやってきた。
オ 先生の顔を見たたん、宿題を忘れていたことが動員されて頭が真っ白になった。

B「温床」

ア 地元の野菜を温床としたシチューを看板メニューに掲げて、横浜に新規出店した。
イ 人は大きな願いになればなるほど、自分の力で解決せずに温床に頼ってしまうものである。
ウ 私に何度もアドバイスを求めておきながら、結局彼はそれを温床としなかった。
エ 日々当たり前の練習を続けてきた結果、自分なりの温床を生み出すことができた。
オ 多くの不正が発覚しているこの会社では、説明責任への意識の低さがその温床になっている。

問二——線部①に「『妖怪』という言葉をどのように定義したらいいのか」とありますが、筆者は

どうして「妖怪」という言葉を定義しようとしたのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が好きな分野である妖怪について、その存在を信じてもらうためには、何をもって妖怪とみなすかはつきりさせて議論を進めるべきだと考えているから。

イ 研究を有意義なものとする上で、不思議な存在として暫定的に定義しただけでは、対照的な存在である妖怪と神との区別がつけられず、議論の妨げになると考えているから。

ウ 日本の人文科学では、用語や概念の定義をしようとしにくい傾向が強いが、妖怪についての学問的な議論を成立させるためには、それらの定義が必要不可欠であると考えているから。

エ 妖怪というものはあいまいで、時に神とも混同されてしまうが、そこを区別して妖怪の特徴を見極めるためには、現実をふまえた正確な定義がなくてはならないと考えているから。

オ 研究対象としての妖怪は捉えどころのないものであり、長年研究してもいまだに一時的な定義しかできないほど、定義するのが難しいものだと考えているから。

(1-25)

問三——線部②に「私はなぜ『妖怪』を取り上げようと思ったのか」とありますが、文化人類

学を専門とする筆者が「妖怪」を取り上げたのはどうしてですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これまで妖怪は文化人類学ではなく文学の領域に属するものとして見られてきたが、文化人類学の領域として論じること、新たな視点で日本の文化を捉えることができる考えたから。

イ 現地に行つてフィールドワークをすることが難しい状況では、自分の好みに合っており、身近な存在でもある妖怪について調べることでしか全体像を探ることができなかったから。

ウ 教科書を編纂したのをきっかけに、知識と信仰の関係に注目したが、その関係によって日本人の精神世界を説明することができそうなテーマが自分の好みに合う妖怪だったから。

エ 自分自身が様々な地域に出かけていった結果、民間で語り継がれている妖怪というテーマこそが、日本人の精神世界を通じて文化の普遍性を明らかにできるものだと思つたから。

オ 文化を全体的に把握しようとする文化人類学では、直接全体像をつかむのは不可能なので、まずは自分の興味に応じて、妖怪という側面から日本人の精神世界に迫りたいと思つたから。

(1-26)

——線部③に『ぬりかべ』のような現象」とありますが、筆者が『ぬりかべ』のような現象

ア 存在として捉えられるようなものばかりでなく、目に見えない「ぬりかべ」のようなものも含めて、「妖怪」として幅広く研究の対象にしたいと考えているから。

イ 民俗事象としての「ぬりかべ」がひとつの現象として伝承されていくことで、「妖怪」であることから排除されないようにしたいと考えているから。

ウ 「ぬりかべ」のような荒唐無稽な現象であつても、それを「妖怪」とみなすことは、その現象を信じていた当時の人々にとっては合理的なことであつたと考えているから。

工　とかく擬人^{ぎじん}化^かされがちな「ぬりかべ」のようなものを、キャラクターとしてではなく、現象そのものとして捉えることで、真摯^{しんし}な態度で「妖怪」と向き合つて研究したいと考えているから。

才 日本各地に点在し、それぞれの土地ならではの特色ある妖怪たちに、共通する視点を設定するには、「ぬりかべ」のようなものも「妖怪」の中を含めるべきだと考えているから。

問五——線部④に『科学的知識』『非科学的な道具的知識』『信仰的知識』とありますが、次の

A 急^せいては事をし損じる

B つばめが低く飛ぶと雨が降る

C 来年のことを言う^{おに}と鬼が笑う

ア A 科学的知識
B 非科学的な道具の知識
C 信仰の知識

イ A 科学的知識

B 信仰の知識

C 非科学的な道具の知識

ウ A || 非科学的な道具的知識
B || 科学的知識
C || 信仰の知識

工 A || 非科学的な道具の知識
B || 信仰の知識
C || 科学的知識

才 A || 信仰的知識
B || 科学的知識
C || 非科学的な道具的知識

問六——線部⑤に「このように分析された『知識』とありますが、この「分析」はどのような観

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

氏名

番

二〇二一年度

【注意】 解答はすべてこの解答用紙に記入すること。

得点合計

①	
②	
③	
④	
⑤	

①	
②	
③	
④	
⑤	

問	A
	B
	C

11

[illegible]

60 40 20

109

[illegible]

10

問	A
一	
	B

[illegible]

--	--

A vertical rectangular sheet of yellow paper featuring a grid of dashed black lines. The grid consists of 10 columns and 20 rows, creating a total of 200 small squares. The lines are evenly spaced and extend across the entire page area.

10